

修士論文要旨

学籍番号

第 20GH106 号

氏名

人文社会科学専攻（コース：文化芸術コース）

三村 咲

論文題目

新たな音響共同体の構築に向けて
—コミュニティ・ミュージックと教育—

コミュニティ音楽という言葉は、例えばISME（国際音楽教育協会）のコミッション・セミナーの一つにもその名前が使われているように、音楽教育の場において近年耳にすることが多い。2004年にはInternational Journal of Community Musicの第1巻が発行され、コミュニティ音楽について議論が進み出している。しかし、コミュニティ音楽についての概念は各国で異なり、未だに共有されていない。ISME・コミュニティ音楽(Community Music Activity (以降CMA))、コミッションの成立に影響を与えたアメリカとイギリスのコミュニティ音楽活動を比べてみても、活動の形態は様々である。そして、教育の視点から、課外活動や生涯教育、社会参加の意義について言及されていることが多く、音楽そのものにスポットが当たらず、社会的有用性や効果などが強調されている。一体、コミュニティ音楽とは何なのだろうか。既に存在する音楽と何が異なるのだろうか。

イギリスのコミュニティ音楽研究者として知られるリー・ヒギンス (2012) は、アメリカやイギリス、北欧、アフリカ等、様々なコミュニティ音楽の主要な概念を次の3つに分類している。1) 伝統文化や人々の共同体が大切にする音楽そのものである「コミュニティの音楽」；2) 人々が集まって行う「共同で行う音楽活動」；3) 英国式である「音楽リーダーが介入して参加者と協働して行う積極的音楽活動」である。

しかしながら、ヒギンスがここで指しているコミュニティ音楽とは、これまで例えば民族音楽学が研究対象としてきた、西洋クラシック音楽やポピュラー音楽などを除く、非西洋の音響文化であると考えられる。このような特定のコミュニティと密接にかかわってきた音響文化は数多く存在する。つまり、音楽は常に特定のコミュニティとの関係性において存在してきたとも考えられる。それでは、なぜ「コミュニティ音楽」という概念が提唱されたのだろうか。元々コミュニティ性があると考えられる「音楽」に、わざわざ「コミュニティ」という接頭語が付与されたのは何故か、という疑問を筆者は抱いた。以上から、本研究では、文献調査を基盤にヒギンスの考えるコミュニティ音楽の概念をもう一度検証し直し、新たな音響共同体のかたちを考察する。さらに、コミュニティと音楽の関係を改めて見直し、新たな音楽を創造する音楽活動を模索する。

そして、カナダの作曲家であるマリー・シェーファー (1933-2021) が著書『世界の調律』(2006)で述べる「音響共同体：acoustic community」や、シェーファーがコミュニティ音楽として行なったサウンド・エデュケーションから、ヒギンス (2012) が述べるCreative Music Makingを分析するとともに、新たなコミュニティ音楽のデザインについて考察する。